

北へ加予川を流るの登壇一在り時は高潮二達一在り時七加予川は
 先ノ獄中ノ感想を述べて今度の労働争議に於て諸君否天下
 の人が三ツの大なる事を知つた事一を非お其外一は神戶の労働者は
 一ツの久留川下は動かあり労働運動は各労働者共人の運動
 である事一私共が収益を止るは労働争議が續けらる事に
 依りて立證出来る第二は此度の我々の要求は三ツの要員制度とか
 團體其他認めらるるも當然の要求であるにも拘らず之を退け其間
 英國炭礦争議の例を引いて加予川造船所ノ積立金は労働者
 が八割迄要求するが當然の要求を此度の惨敗は斯く如き
 事を要求するの時より来た事を非お才三に労働運動は之の流れ
 はせよ止めりしに到れば何れも止るべき能はざるを力説して降壇
 次は鈴木愛倉氏は種労働運動の使命に就き促し降壇一同

惨敗の歌を高唱して午後四時散會當今晚同盟本部は
 於て川崎三菱兩争議場性有救済合同委員會開催の案
 明々白晝失敗者等の團結を個人(五七者會)の究會式
 を揚中宣言書を讀み常任の幹事を撰出し実行の方任を
 決定する事あり当地は西蘭會堂に亡者を催す古め皮肉
 ある意味合を有する様にして川崎例の立事は川崎民より
 民主主義は三菱製鋼より撰出案に詳細は明日報告申上り
 至急の事故執筆等世社の役所請下りて以後
 百十四日午後六時 迄也 敬

添田 敬